

# 女子高校生制服の時代的推移

——阪神間私立女子高校生制服の実態調査に基づく一考察——

神 田 美 年 子

## 一、緒 論

## 二、女子高校生制服の性格

- 1、制服の象徴性
- 2、制服の実用性
- 3、制服の審美性

## 三、調査対象及び方法

## 四、調査結果と考察

- 1、制服の必要性とその理由
- 2、自校制服の好き嫌いとの改良点
- 3、制服の利用度
- 4、制服の所持数
- 5、通学服に適した型と色
- 6、制服を除く通学用被服類について

## 五、結 論

女子高校生制服の時代的推移

## 一、緒　　論

戦後物質文化の高度の発展は衣服の改良進歩にも著しい影響を与えている今日、各種の制服についての考え方が一般に徐々に変わりつつある傾向は見逃せない事実である。即ち衣服の三要素である象徴性・実用性・審美性のうち従来  
の制限は象徴性と実用性に重点が置かれ、稍もすると審美的条件は忘れられていたかの感がある。ところが最近においては或る劇場の案内者の制服のデザインは広く一般から募集され、そして選ばれた制服は戦前には国内の何処にも見られなかつたほどの派手な色彩と瀟洒なデザインであつたが、その制服は劇場にマッチして、その制服から醸し出されるムードは非常に効果的であり、近代性の美しさをもつていた。また同じような意味で伊豆半島に観光ムードを強化するために、新しく架設される鉄道の乗務員の制服を解放的で、観光客に親しめるデザインにすることが必要であると業主は語つてゐる。其の他既に制服の代表的なものとして扱かれてゐる軍隊・警察官・国鉄職員  
の制服も、従来の官僚的な堅苦しさから開放されて、出来るだけ国民に近親感を与えるようにと配慮された結果、詰襟から背広襟に、ネクタイも蝶ネクタイに、色彩にも柔みを持たせてある。これらは従来  
の制服に対する觀念が文化水準の高度化に伴つて、外面的要素から内面的に及ぼされつつあることを証明してゐる。即ち封建制度下における権力の象徴化を意味したり、或は堅牢で安価である実用性を主とした制服の性格の変化と見ても差支えあるまい。

一方学生の制服は相変らずの実用主義で変化に乏しいことは社会人のそれに比ぶべきではない。また男子学生の制服においては戦前夏に用いていた小倉の霜降りの詰襟は跡形もなく消え失せて、申し合せたように白の開襟シャツを着用することになつたのは合理的な自然の姿と見るべきである。ところが女子高校生の制服、殊に私立女

子高校生の制服はと見ると何十年も前のものをそのままの姿で着用しているところもあれば、型や生地も戦前と殆んど同じものを用いていることは、関係者の中には制服を着用することによつて伝統が維持されているかのよう考へたり、或は「制服なるが故に變えてはならない」というような固執した意見を持つているのではなからうか。

そこで筆者は阪神間の私立女子高校生の制服に関する実態調査を行い、それを資料として時代に適切な女子高校生制服の条件を考察して見たいとおもふ。

## 二、女子高校生制服の性格

まず衣服の三要素である象徴性、実用性、審美性の面から女子高校生の制服を考察してみると、

### 1 制服の象徴性

服装の上で一つの統一された服が制服である。制服は身分・職業及び階級を明らかにし、制服を着ることによつて外観的な権力を示すことが出来る。また団体行動をする上にも他の団体との区別や、規律・命令などにも都合がよい。内面的には服装の統一によつて精神を緊張させ、規律を厳正ならしむると同時に団体精神を生じ、自ら集団としての統一がとれる。

学生の制服もまたこの意味において学生の身分を象徴し、精神的には就学の意識を強く感じさせ、秩序ある生活態度を習慣づける役割を持つてゐる。学生の場合は軍隊や警察官などの官吏の特権を明示したり、看護婦や国鉄職員、私企業のとくに職業を象徴する必要はなくとも、各々の学校別を象徴する必要はあろう。男子の高校生の殆んどは制帽を冠り、帽章が学校を明示するが、女子の場合は校章はあつても男子の制帽や帽章に代るものがないので必然

的に制服がその役割を持つようになり、従つて型や色や附属品でその特色を表現しようとするのである。

## 2 制服の実用性

衣類の中でも特に日常着は実用性をその目的としている。殊に学生服は他の制服よりもこの面に重点のおかれる理由は学生生活が無収入期間であるためなるべく安価で、しかも丈夫なものが要求されるのは当然のことと言えよう。更に多目的に着用出来る便利さも制服の利点として重宝がられていた。制服の着用範囲を挙げてみると、

- |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|
| a 通学服 | b 体操服 | c 作業衣 | d 家庭着 |
| e 外出着 | f 遊び着 | g 旅行着 | h 礼服  |

等、寝衣を除く衣服のあらゆる面に着用しようと思えば出来ないことはない。古い百科辞典には、「制服はどんな場所に用いても差支えない」と定義されているように、一着で足りるといふ魅力が制服文化の隆盛を支えている一番強い要因である。また姉妹が同じ学校で学ぶならば姉のものを妹が使える便利さもあろう。

次に経済的な面では同じ生地で、同じ型の服を多量に生産することは生地の購入、型紙の作製、生地のカチ合せ、縫製の容易さ（流れ作業も可能）などは既製服として取扱われるので安価に求めることが出来る。男子の制服を素人が縫製することは困難であつても女子の制服、殊にブラウスやスカートならば生徒自身で作ることも出来る。また制服に汚れが目立たぬ色が選ばれるのは長期間着用出来て衣類整理の手間と費用を出来るだけ軽減する目的で経済的に考えられたのである。

## 3 制服の審美性

従来の制服で最も軽視されていた条件が審美性である。その原因は、

- a 学生生活は勉学にいそしむ期間であつて、おしやれば身を誤るものとされていた。

- b 学生は質実を旨となし奢侈は極度にいましめられた。
- e 学生は規律を守り、自由の行動は厳禁されていた。
- d 伝統を墨守し、改良するための努力と思想がなかつた。
- c 学生は無収入である。

ことなどが、実用性に重きをおかれた理由で、美的なセンスを生かしたり、装飾的な匂いを制服の中に取り入れるだけの余裕がなかつたのである。即ち制服を着ている期間は審美的知識や感覚の成長も止ることになり、美的感覚の発達を阻害することになる。

今日の女子教育では、各教科に美的要素が織り込まれ、殊に家庭科の教育には、色彩学や、デザイン学が喧ましく叫ばれている時代に審美的でない衣服を身に纏っていることは、考え直さなければならぬ。

カールイルの名著「衣裳哲学」には「人間が衣裳を作り、衣裳が人間を作る——」と書かれているが、「衣裳」を「制服」という言葉に置き換えてみると「制服が人間を作る」ことになる。些さかも美的要素の考慮されていない制服に包まれて、よい趣味や感覚を育てるべき大切な少女時代を過ぎさせることはまことに残酷なことと言えよう。さらにカールイルの言葉を借りていうならば、条件の整つた合理性のある制服は質のよい生徒を育てることにもなる。現に有名校の卒業生は、そのプライドを制服で表現して追憶のよすがとなし、或る学校では制服の緑の袴に憧れて志望する生徒が多かつたという。また戦時色華やかなりし頃、時代の寵児であつた海軍将校には花嫁候補が多いのに比し、陸軍将校は人気がなかつたというのは、これは陸軍の軍服より海軍のデイナー・ジャケットに短剣姿が瀟洒で審美的であつたからであろう。これらは制服の生んだほほえましい挿話であるとともに、当時と、いえども制服の審美性については充分関心が持たれていたことを立証しているのである。既に時代は躍進し、衣生活が高度に発展していると

きに、いかめしい特権を象徴したり、実用性に固執しているべきではない。特に知性に富み、情操豊かな近代女性を育むには生活に親しめる、瀟洒で審美的な制服こそ望ましい。

### 三、調査対象及び方法

以上述べた三要素に充分筆者は注意を払つて以下の実態調査を行つた。

阪神間の私立女子高校の中から五校を選び最上級生六五一名を調査対象とした。学校選定の条件は

- (1) 制服制定の有無
  - (2) 制服の型が異つていること、
  - (3) 学校の所在地及び生徒の生活環境の差
- などである。五校のうち、一校のみが制服を制定していない。学校の所在地は大阪・神戸及び阪神間の都市で、生徒の家庭の所在地もそれに従い大阪市・神戸市・西宮市・芦屋市及びその近郊である。そのうち一校は都市の端に位するので、郡部から通学する生徒も若干あつて、生活様式も稍異なるように思われる。家庭の職業はA・B・C・E校は給与生活者及び商業が多く、生活水準も比較的高い。B校は給与生活者の中でも会社役員が多く、所謂上流家庭の子女が多い。D校には商業・給与生活者の他に農業も多少あるようである。

次に規定されている各校の制服の様式は「第1表」である。

調査方法は質問紙法により設問を

- (1) 制服の必要性とその理由
- (2) 自校制服の好き嫌いと改良点

第1表 調査対象校の制服

種類	校名 季節 型色生地	A 校			B 校			C 校			D 校			
		型	色	生地	型	色	生地	型	色	生地	型	色	生地	
		ワンピース	夏	セーラー型④ ボックス・ブ リーツ⑤	白紺	綿ブロード 毛サージ								
上着	夏				セーラー型 半袖カフス付	白	綿ブロード					背広型 ダブル釦4	白	綿ブロード
	冬	セーラー型 長袖カフス付	紺	純毛サージ	セーラー型 長袖カフス付	紺	純毛サージ	背広型 シングル釦3	紺	純毛サージ	背広服 ダブル釦6	黒	純毛サージ	
スカート	夏				オール・プリ ーツ 裃数24 チョツキ付	紺 白	純毛トロピカ ル 綿キョラコ	オール・プリ ーツ 裃数 24	紺	純毛サージ	ボックス・ブ リーツ 裃数 4	黒	純毛サージ	
	冬	オール・プリ ーツ	紺	純毛サージ	オール・プリ ーツ 裃数24 チョツキ付	紺 黒	純毛サージ 綿襦子	オール・プリ ーツ 裃数 24	紺	純毛サージ	ボックスブリーフ ジャンパースカート 裃 4	黒	純毛サージ	
ブラウス	夏							ウイング・カ ラー オーバーブラ ウス	白	綿ブロード				
	冬							ウイング・カ ラー 長袖ブラウス	白	綿ブロード	ウイング・カ ラー 長袖ブラウス	白	綿ブロード	
附属品 備考	夏	ネクタイ (絹地・紺色) 白線 (3本) ベルト (黒エナメル)			白線 (3本) ブローチ (いぶし銀)			※スカートの型は同じで 生地は夏は薄手の毛を 用いる			※冬服の上着を除いたも のが合着従ってスカー トは夏と冬と別			
	冬	ネクタイ (絹地・紺色) 白線 (3本) 刺繍(袖,白)			夏に同じ									

- (3) 制服の利用度
  - (4) 制服の所持数
  - (5) 通学服に適した型と色
  - (6) 制服を除く通学用被服類について
- の六種に分類し、それぞれに適當と見做される項目を設けて自由に選ばせた。またその他制服に対する意見があれば述べてほしいことも付け加えた。

#### 四、調査結果と考察

##### 1 制服の必要性とその理由、

制服を採用している学校では九六%が必要性を認めている。(第2表) その最大の理由は学生意識を強めることと、集団として統一のとれること(第3表8・13・14・15・16)及び経済的な点(第3表2)である。有名校の生徒は制服を着ることによつて自分が有名校の生徒であることのプライドを持つ(第3表・4)と同時に、世間一般人にも有名校の生徒であることを象徴することが出来るのでその点にも魅力があるようだ。次に身分を同一環境において団体生活が楽しめる安定感を制服に求めたり、(第3表・12)服装に対する気遣いをしないですむ(第3表・9)というような点は考え方によつては一種の虚栄心の働きのようにもとられて自主性が乏しいと見られても仕方がない。

制服の必要性を認めない生徒の方は象徴性に関しては無関心で、校章があれば結構だと云い、経済的な面でも私服の他に制服を調製しなければならぬことは却つて不経済であり、外出着、ふだん着の別なく、通学服として着ることの方が便利でもあり経済的であると反論している。

第2表 制服の必要性

学校名	A校	B校	C校	D校	E校	計
制服がある方がよい(X)	140	129	145	92	14	520
回答総数 (Y)	145	133	150	93	130	651
X/Y (%)	97	91	97	99	11	80

注 E校は制服を採用していない。

「第3表」以下の人数の%は回答総数(Y)にもとづく。

第3表 制服がある方がよいの理由

順位	項目	A校		B校		C校		D校		E校	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
a	制服がある方がよい	140 人		129 人		145 人		92 人		14 人	
1	実 用 的	15	14	17	13	28	19	23	25	1	7
2	経 済 的	59	42	46	36	45	31	51	55	4	29
3	他校との生徒の区別が見易い	32	23	38	29	31	21	14	15	5	36
4	プライドを示す	33	24	66	51	52	36	3	3.3	3	21
5	便 利 さ	9	6.4	15	12	19	13	12	13	1	7
6	運動に便利	0	0	0	0	1	0	1	1.1	0	0
7	丈 夫	8	5.7	4	3	3	2	3	2.3	0	0
8	学業をする気分になる	25	18	29	22	50	35	18	20	1	7
9	好みを考える必要がない	15	14	35	27	24	17	25	27	2	14
10	広範囲に着用出来る	11	8	2	1.5	30	21	15	16	0	0
11	姉から妹へゆずれる	1	0	1	0	3	2	2	2.2	0	0
12	同一環境で貧富にこだわらない	49	35	35	27	57	40	37	40	3	21
13	団体行動に便利 (例……修学旅行)	49	35	46	26	57	40	45	49	9	64
14	学生らしく品位がある	122	87	99	77	124	85	62	67	10	72
15	秩序ある生活が出来る	57	41	34	26	50	35	15	16	6	43
16	精神が緊張する	15	14	30	24	33	23	13	14	4	29

制服のない学校の生徒は八六%までが必要性を認めない。理由としては日常の衣服に個性を生かすこと(第4表・2)が出来たのを制服のない最大の利点としている。次いで衣服に対する審美眼がなくなること(第4表5)を恐れ、それは卒業後の服装にまで影響して、「制服のある学校出身の人の服装は派手でいて野暮つたい」と批判している。次に気温に対する衣服の調節が困難な点(第4表・8・9)重くて活動に不便な点(第4表・12)をあげている。

制服のない学校の生徒で必要性を認めている者はごく少数ではあるが、その理由は主として学生意識を強めることと、団体行動の統一性(第3表・13・14)で、この点制服のある学校の生徒で必要性を認めている者と共通している。

第4表 制服がない方がよいの理由

順位	項目	学校名									
		A 校		B 校		C 校		D 校		E 校	
		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
b	制服がない方がよい	5		4		5		1	100	116	
1	束縛されない									55	45
2	個性を生かす			1	25	3	60	1	100	104	90
3	バラエティーに富む	5	100	1	25					24	19
4	衣服の流行におくれる									0	0
5	衣服に対しての審美眼がなくなる					2	40	1	100	55	44
6	かたぐるしい	1	20							24	19
7	やぼったい	1	20							21	17
8	夏暑すぎる	1	20	1	25					32	25
9	冬寒すぎる	1	20	1	25					16	13
10	季節に対する調節が困難	2	40	2	50	1	20			82	65
11	手入れが面倒(例オールプリント・スカート)	3	60	1	25			1	100	10	9
12	重すぎて活動に不便	3	60	1	25	1	20	1	100	33	25

要するに各自の立場を一応是認した上で物事を判断しているように思われる。

## 2 自校の制服の好き嫌いと改良点

自分の学校の制服をどう思っているかの設問に対して四校のうち二校が「好き」が多く(第5表、1)「好きでも嫌いでもない」者が全体で約四〇%占めている。(第5表・3)C校は「好き」より「どちらでもない」の意見の方が多いのは冬服は好きでも夏服があまり評判がよくない点(第6表2・3)にあるらしい。

次に「嫌い」の理由と見做される改良点を考察して見ると。

- a 型がやばつたい (第6表・2) (D校42%)
- b 夏暑すぎる (第6表・3) (B校40%)
- c 合着があるとよい(第6表・5) (A校16%)
- d 活動に不便 (第6表・7) (A校14%)

等で審美性と合理性の見地から欠陥を指摘している。

D校の場合は夏服の上着がダブルで、見た目に暑苦しく感じられるのが「嫌い」の原因となつている。「第6表」によると改良の点でC校の「型がやばつたい」と「夏暑すぎる」の多いのも目立つ。C校の夏の上着はブラウスで、襟がウイング・カラーで詰つていることと、オーバー・ブラウスが体操服のようだから嫌いだとの意見もあつた。同様にA校・B校の「夏暑すぎる」(第6表3)の原因も、両校の制服がセーラー型であるから大きな襟が背中を覆うので暑いのと、一つは頭から冠るので着脱に不便なことも手伝つているのだろう。一人人間で汗の多く出る場所はどこかというと前額部・胸・背・腰部の順であるが、その背中に大きな襟を背負せることは可愛想でもあるし殊にその襟がウールであつたりすると尚更である。その上A校のはワンピース(第1表)であるから洗濯やアイロン仕上げにも

第5表 自校の制服の好き嫌い

順位	項目	学校名		A校		B校		C校		D校	
		人数		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1	好き	69	48	74	55	51	34	11	15		
2	嫌い	17	12	14	10	21	14	39	42		
3	どちらでもない	59	40	45	34	78	52	43	46		

第6表 改良した方がよいと思う点

順位	項目	学校名		A校		B校		C校		D校	
		人数		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1	色が嫌い	2	1.4	1	1	2	2	5	5.5		
2	型がやぼったい	8	5.5	38	29	40	27	39	42		
3	夏暑すぎる	28	19	53	40	28	19	9	9.7		
4	冬寒すぎる	1	1	1	1	1	1	0	0		
5	合着があるとよい	23	16	13	10	20	14	2	1.3		
6	夏のスカートと冬のスカートは別の方がよい	7	5	6	4.5	16	11	6	6.5		
7	活動に不便	20	14	7	5.7	5	3	6	6.5		
8	用布が多くいる	0	0	0	0	0	0	1	1		
9	価格が高すぎる	8	5.5	0	0	12	8	1	1		

労力が倍加されるし、セーラー  
 襟のラインの始末は仕上操  
 作に面倒である点などを考え  
 合せると、セーラー型はデザ  
 インはよいとしても、これら  
 の点から夏の制服としては適  
 当なものとはいえない。

どんな型でも夏服として注  
 意する点は衿割を大きくする  
 ということである。その他夏  
 暑すぎるのにスカートがあ  
 る。B校とC校は紺のウール  
 で、オール・フリースであ  
 る。C校はウエストで占め、  
 B校はチョッキで吊つてい  
 る。このスカートはこの年代  
 の人には適当な型ではあるが  
 布が多くいることと整理に面

倒で然も暑い。アイロンをかけると生地を傷めるので大抵は畳敷をするが、それには相当の時間がかかる。しかも毎日のことでもあり厄介な仕事である。

そこで考えて見たいと思うことは、女子高校生の制服の生地は（第1表）のように殆んどが羊毛と綿である。スカート生地に思い切つて熱可塑性を利用したパーマネント・セットのスカートを採用すればこの問題も自然に解決される。これと全く同じ理由で夏服の上着やブラウスに用いられている綿ポプリンや綿ブロードは、「第7表」によると夏の衣服材料としては必ずしも適切な生地とは云えない。

即ち水梨サワ子氏の研究によると「被服材料の性質と衣服氣候の關係は保温性大なる布が必ずしも衣服氣候としての高温を示さず、また通気性の大なる布が低温でもなく、被服材料の性状は衣服氣候の温度や温感に複合的な影響を示している」によると、ビニロンやテトロンの方が型や構成によつて涼しいと感じることは確かであろう。その他、「第8表」の諸組織の性能比較表にもあるように伸びの回復率がよくて皺にならない点軽い点等一応制服に適した材料といえよう。最近 Wash Wear, Wrinkle Free, Work Saving Easy Care 等のキャッチ・フレーズでこの繊維は広範囲に利用されているが所謂合理性のある繊維として夏には綿との混紡、冬には毛との混紡等が制服に適切な材料として考えてみるとよい。その他ジャンパー・スカート・太いベルト等は夏服として不向なことは一般の認めているところである。

合着については比較的深い関心を示しているのは従来の氣候の変化を無視した着用期日（夏服六月一日―九月三十一日）  
（冬服十月一日―五月三十一日）  
の制定や、夏服と冬服の二種類では季節の調節が困難であることを裏付けている。A校の「活動に不便」はワンピースの不便さを云つていゝるのではなからうか。好きでも嫌いでもない者は設問に対してあまり回答もしていない点から察すると制服に対しての関心が少ないのか、それとも既に決められたものに批判することを快よく思つていないのか、

第7表 被服材料の性質と衣服気候との関係（化繊ブラウスについて）被服学科水梨サワ子より  
 衣服気候（平均 30.8°C, 湿度 70.8%の場合）

ブラウス		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
皮膚表面温度	左胸	35.3	35.2	35.1	35.1	35.1	35.0	34.9
	右背	34.8	34.8	34.8	34.7	34.6	34.7	34.7
	左脇	35.4	35.4	35.3	35.5	35.5	35.4	35.4
	上膊	35.0	35.0	35.1	35.1	35.1	35.0	35.1
	平均	35.1	35.1	35.1	35.1	35.1	35.0	35.0
衣服最内空気層温	左胸	34.3	33.8	34.1	33.9	34.2	34.1	34.2
	右背	32.9	33.0	32.7	32.7	32.7	32.9	32.8
	左脇	34.6	34.4	34.7	34.8	35.0	34.7	34.9
	上膊	33.9	33.8	34.0	33.8	33.9	34.0	34.0
	平均	33.9	33.8	33.9	33.8	34.0	33.9	34.0
衣服最内空気層温	左胸	81.0	78.9	76.4	78.4	77.4	76.0	76.0
	右背	88.9	84.7	83.5	84.6	84.3	83.9	83.9
	左脇	86.3	81.9	81.8	86.0	86.9	86.2	86.2
	上膊	74.1	71.1	69.9	71.4	72.3	71.2	71.2
	平均	82.6	79.2	77.9	80.1	80.2	79.3	79.3
温感		7	6	5.5	6	6	6	6

ブラウス		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
皮膚表面温度	左胸	35.4	35.3	35.3	35.3	35.3	35.2	35.3
	右背	34.9	35.1	34.9	34.9	34.9	34.8	34.8
	左脇	36.1	35.8	35.8	35.6	35.8	35.4	35.6
	上膊	34.9	35.0	35.1	35.1	35.1	35.0	35.0
	平均	35.3	35.2	35.3	35.2	35.3	35.1	35.2
衣服最内空気層温	左胸	33.7	33.7	33.8	33.8	33.9	33.6	33.8
	右背	32.8	33.0	32.9	33.0	32.9	32.9	32.9
	左脇	35.1	34.8	34.6	34.7	35.1	34.6	34.9
	上膊	32.9	33.0	32.9	32.9	32.8	32.8	33.0
	平均	33.6	33.6	33.6	33.6	33.7	33.5	33.7
衣服最内空気層温	左胸	63.3	59.7	56.3	60.5	61.2	61.0	61.0
	右背	66.9	63.5	61.0	64.3	65.8	65.6	65.5
	左脇	74.1	72.1	69.7	73.2	75.0	73.9	75.2
	上膊	59.8	57.8	57.5	59.2	59.8	59.5	60.5
	平均	66.0	60.8	61.1	64.3	65.5	65.6	65.7
温感		5.7	4.8	4.1	4.3	4.9	4.7	4.8

「注」ブラウス ①ポプリン {アセテート 90%  
レーヨン 50%} ②ビニロン混紡金巾 {ビニロン 50%  
レーヨン 50%} ③ビニロン金巾 (バニロン 100%)  
④ナイロンタフタ ナイロン 100% ⑤ナイロン混紡トロピカル {ナイロン 30%  
レーヨン 70%}  
⑥アセテートタフタ (アセテート艶消長繊維 100%) ⑦混紡トロピカル {アセテート 50%  
レーヨン 50%}

第8表 諸繊維性能比較表

性質		天然纖維			再生纖維	半合成纖維	合成纖維		
		木綿	絹	羊毛	レーヨン	アセテート	ナイロン(6)	ビニロン	テトロン
強度 g/d.	乾	3.0~4.9	3.0~4.0	1.0~1.7	1.8~2.3	1.2~1.4	4.2~6.6	4.2~6.0	4.0~5.3
	湿	3.3~5.4	2.1~2.8	0.76~1.63	0.9~1.2	0.7~0.9	3.6~5.7	3.2~4.8	4.0~5.3
伸度 %	乾	6~10	15~25	25~35	18~24	25~30	38~45	17~26	40~55
	湿	7~11	20~30	25~50	24~35	30~40	40~52	19~30	40~55
比重		1.54	1.36	1.32	1.5	1.32	1.14	1.3	1.38
伸びの回復率 %		74 2%伸張	54~55 8%伸張	99 2%伸張	30~74 4%伸張	90~100 2%伸張	96~100 3%伸張	75~80 3%伸張	95~100 3%伸張
ヤング率(kg/mm <sup>2</sup> )		800	950	260	800~1000	405~700	150~250	530~820	400~800
水分率 %		8.5(公定)	11	16	16(公定)	6.5(公定)	4.5(公定)	5.0(公定)	0.4
軟化への溶融点 (C°)		—	—	—	180	200	180	220~230	238~240
摩擦強度		稍強	稍強	稍強	弱	弱	強	強	強
耐酸性		弱	強	強	弱	稍強	強	強	強
耐アルカリ性		強	弱	弱	稍弱	稍弱	強	強	強
プレス保持性		可	可	稍良	可	良	良	良	優
洗濯安定性		不可	可	不可	不可	優	優	良	優
染色性		優	優	優	良	良	良	良	良

或は夏、冬のどちらかが好きで、どちらかを嫌いであるかのどれかであろう。

### 3 制服の利用度

近時使用目的に応じた機能的な服種が急増したことと、化繊の著しい進出による豊かな衣生活が制服にも影響してか、制服を通学用だけに用いている者が、一校を除いての大部分を占めている。(第9表・1) スポーツ用には体操服を用いている(第9表・2)し、家庭着との区別はつけている(第9表・3)し、外出着も私服を用いることが多い。(第9表・5) 「第9表・6」の「行く先によつて制服を用いる」の行く先は学校に関係のある場所と考えて回答しているように思われる。冠婚葬祭に学生服を用いる(第9表・7)のは、此の場合学生の身分を象徴することが有意義であるためと考えられる。D校は他校に比べると稍広範囲に着用されているが、これは前にも述べたように都心から離れた遠隔地から通学する者が多いのでその人達の生活環境において多目的に利用されているように考察される。いづれにせよ従来に比べて女子高校生の制服の利用度が縮小されたことは事実であつて、ここにおいて制服を一種のユニフォームと考えてもよい理由が生じるのである。

第9表 制服の利用度

順位	項目	学校名		A 校		B 校		C 校		D 校	
		人数		実数	%	実数	%	実数	%	実数	%
1	通学用だけに用いる	126	87	114	86	96	64	38	41		
2	運動のときは体操服に着かえる	145	100	133	100	150	100	66	71		
3	帰宅するとすぐに私服に着かえる	143	93	120	99	135	90	73	79		
4	時には着替えずに制服を着ている	2	1	4	3	2	1.3	1	1		
5	外出用は全部私服	96	49	95	71	57	38	22	24		
6	行く先によつては制服を用いる	54	28	28	21	101	67	65	59		
7	お祝いや、葬式には制服を着る	61	31	41	31	73	48	44	47		

4 制服の所持数

第10表 制服の現在における所持数

種類	学校名 季節	A 校					B 校					C 校					D 校				
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
ワンピース	夏	9	109	23	3	1															
上着	夏	1					7	64	48	12	2						7	31	51	3	1
	冬	123	22	0	0	0	83	45	5	0	0	129	21	0	0	0	92	1	0	0	0
スカート	夏						110	19	4	0	0	109	18	0	0	0	85	8	0	0	0
	冬	109	36	0	0	0	89	41	0	0	0	110	34	6	0	0	87	6	0	0	0
ブラウス	夏											4	46	49	34	18					
	冬											0	41	65	28	15	5	23	51	10	4

第11表 制服の着古した数

種数	学校名 季節	A 校					B 校					C 校					D 校				
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
ワンピース	夏	19	31	1	1	0															
上着	夏						19	47	19	7	0						17	11	8	2	0
	冬	44	5	1	0	0	64	8	3	2	0						11	1	0	0	0
スカート	夏						29	6	2	0	0	19	6	0	0	0	12	0	0	0	0
	冬	312	6	0	0	0	62	12	0	0	0	26	8	0	0	0	11	1	0	0	0
ブラウス	夏											23	24	9	9	3					
	冬											16	30	15	5	2	10	17	5	7	0

各々の学校の制服は異つていても調査の結果(第10表)に共通点を見出す。即ち夏服は二〜三着が一番多く、一着だけの者は四着持つている者より少ない。この位の年頃は活動的で汗をよくかくので着替えるために多くを必要とするのであろう。冬服は一着の者が大部分であるが、考えて見ると随分長期間に亘り、一着の服を着続けるとしたなら汚れも甚だしく、制服の必要性を認めない生徒が「不潔だ」というのも無理ないことである。序でに着古した数も調べて見たところ筆者が想像していたより着古した数が多いのは、従来のようにだぶだぶの服を着ることを好まず、最初から身に合つたスタイルの好いものを用いる傾向から、着古した服は生地損傷ばかりでなく小さくなつて着られないのも多いようにかがわれた。この場合私服であれば譲ることも容易であらうが、制服は箆筒の底の無用の長物となつてしまふ。

以上所持数からも制服が実用性のみならずウェイトがおかれなくなつてきたこと、審美的意識が充分考慮されていることなどが考察されると同時に、制服の必要性を認めない生徒が経済的でないと意見も成立つわけである。

#### 5 通学服に適した色と型

近頃の女子高校生はどんな型や色を好んでいるかという観点から、通学服として適切と考えられる十二種のスタイル画の中から各自の好きな型と色を選ばせた。その結果は(第12表)と(第13表)である。各校とも一番人気のよいのが(第一図)である。この型が選ばれた理由は、

- a 型がオーソドックスで、学生らしい品位がある。
- b 着脱に便利。
- c 気温に對する調節が出来る。
- d 手入れが簡単(オイル・プリーツのスカートより髪が少ない。)

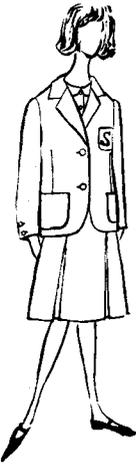
第12表 通学服に適した型

校名 人数	A 校		B 校		C 校		D 校		E 校	
	実数	%								
1	40	28	43	32	94	63	61	66	64	59
2	47	33	50	38	11	7	15	16	9	7
3	16	11	3	2	8	5	3	3	7	5
4	17	12	5	4	10	7	2	2	10	8
5	7	5	22	17	7	5	5	5	17	13
6	8	6	0	0	2	1	5	5	8	6
7	4	3	0	0	3	2	6	6	2	2
8	33	23	24	18	29	19	39	46	45	35
9	13	10	29	22	25	17	23	25	9	7
10	9	6	15	11	16	11	12	13	17	13
11	6	4	5	4	23	15	18	19	9	7
12	1	1	0	0	21	14	5	5	4	3

第13表 通学用に適したスカート

校名 人数	A 校		B 校		C 校		D 校		E 校	
	実数	%								
1	33	23	40	30	21	14	24	26	62	48
2	26	18	40	30	62	41	31	33	0	0
3	16	4	5	4	2	1	3	3	8	6
4	10	7	6	5	8	5	11	12	14	11
5	33	23	40	30	21	14	24	26	62	48
6	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
7	9	6	1	1	1	1	4	4	4	3
8	7	5	8	6	0	0	1	1	6	5
9	15	10	1	1	4	3	1	1	2	2
10	13	9	1	1	4	3	0	0	6	5
11	24	17	11	8	38	25	18	20	4	3
12	2	1	0	0	3	2	3	3	1	1

- e 流行に関係なく、安心して着られる。
- f 色に新鮮味を持たせることが出来る。
- g 部分的に自校の特色を表現することが出来る。



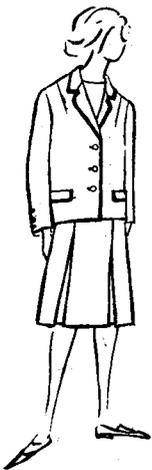
第1図(冬)

女子高校生制服の時代的推移

等で、一応制服として必要な条件を具えている。筆者もこの服は適切なものと推奨出来るもので、ポケットや衿の縁取りに学校の特色を加えたり、或は上着とスカートの色や布を変えすることも可能である。

夏服で一番人気のあつたのは(第10表・8)によると(第二図)である。この型は暑くないように衿を大きく抜き、ピーターパン・カラーで釦もワン・ポイントの極くシンプルなボディとタックド・フレヤー・スカートで構成されたワンピースで、清楚な乙女らしい感じのデザインである。ワンピースは軽快で見た眼にはよいが、洗濯や整理に手間がかかるのでこのデザインを二部式(ブラウスとスカート)に構成するとその欠点は補える。次に選ばれたのが第三図である。これは極く平凡な型ではあるが製作の容易さ、流行にこだわらずにすむ点などにおいて夏服として適当と認められる。殊に家庭科の教材として実習することも可能であるから親しめるデザインと云えよう。

尚合着としてベストとボレロを登場させたところ「第四図」はかなり人気があつた。(第10表・11)これは「自校制服の改良点」で季節に対する調節を要望していたのが具体化されたわけである。「第12表・6・7」に人気がなかつたのは



第5図(冬)



第4図(合着)



第3図(夏)



第2図(夏)

⑥は流行を取り入れた型であり、⑦はダブルの上着が暑苦しく感じられたためであろう。四校の中で、B校・E校が（第五図）を選んだのは（第12表・5）両校の生徒に共通なセンスがあること、同じような家庭環境にある者が多いことなどが考察された。

次に色について言えば、一般に用いられる制服の色彩は暗色で、重い感じの色が選ばれ易い。これは制服が実用性に重きをおき、審美性を軽んじている証拠である。色彩が近代生活に多く取り入れられて来たことは誰も知るところであろう。調査の結果、（第14表）によると冬服は上着とスカートが紺でブラウスが白、夏服は紺のスカートに白のブラウスが断然多い。これは現在の生徒にもまだ従来の制服の観念が残っているものと考えられる。勿論紺色は汚れも目立たず、年令や流行にも関係なく、品位もあつて無難な色彩であるから制服の色として不適當ではないが、観念的に支配されることは面白くない。しかし型のところでも述べたように、「第二図」を選んだ者の大方がチャコール・グレイを好んでいる点や、或は夏服にブルーやベージュを望んでいる点を見逃してはならない。殊に注目すべきは制服のない学校の生徒は色に対しての関心が強く、他校（制服のある学校）の紺色の多い（第12表）に対し、グレイやブルー・ベージュ・茶などとバラエティに富んでいる。またベージュに煉瓦色、焦茶にクリーム、グレイにぶどう色など配色の調和にも豊富な知識をもっている。

最近の新聞に「東日本には東京を中心として派手なボレロ型、スーツ型がよく出るのに対し、西日本は大部分がオードックスなセーラー型が多い。この傾向は東京方面は目新しいものを追う傾向が強いのに反し、西日本は割合じつくりしている。またセーラー型に比べて少量生産で割高のボレロ型、スーツ型を好むのは所得水準が高いことと、見栄をはることが重なっているが、東京方面に当ては「あまり易い」など記載されていた。色にはふれていなかったが、恐らく型と平行して色も漸次変つて行くであろうし、またそうあることが望ましい。

第 14 表 通学服に適當な色

種類 学校名	上 着					ス カ ー ト										ブラウス・ワンピース														
	A校		B校		C校		D校		E校		A校		B校		C校		D校		E校		A校	B校	C校	D校	E校					
	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏	冬	夏				
黒	10		4	6	25		30		1		14		2	1	26	7	63	16	1											
紺	87		92		129		18		42		91	20	87	51	128	77	16	12	30	9										
白		38		65			24		21			19		6		28		17		9	69	87	48	39	18	89	74	46	92	89
チョコレート ルグレイ	24	11	24	2	25		13		40	6	20		29	15	27	10	11	7	35	17										
ブルー	5	8	10	12	8		3		12	9	4	18	1	16	7	22	3	3	16	29	6	6	7	8	6	13	5	5	6	15
ベージュ	5		3		4		2		10	8	8	4	1	4	3	10	1		9	17									2	
焦茶	1		4		2				5		3	7	5	2	2	2	1	1	4	9									5	
クリーム									4	2				2		3			2	2									2	
グリーン	1																				6	7	2	3	3	1	3	2	3	
煉瓦色	1						2		2						1				3											
黄土色																			1	1										
ピンク																				1				5	1	2	4			
ワイン	1		2																5											
紫																														

備考 E校は制服がない

6 制服を除く通学用被服類について

制服の実態調査の序でにオーバーコート・レインコート・セーター・体操服・帽子・靴・靴下・靴・洋傘等について意見を聞いてみたのが(第15表)である。或程度の枠というのは、大体の型や色を規定して他は各自の趣味を繰り込んでよいというのである。オーバーコートについては、五校ともこの項を望んだものが多い(第15表・1)が、

第15表 制服を除く通学用被服類

設問項目 種類	きめられた方がよい										ある程度の枠をもうける					自由										
	A校		B校		C校		D校		E校		A校		B校		C校		D校		E校							
	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%	実 数	%						
オーバーコート	2618	17	1350	33	28	30	0	12277	11486	64	43	45	48	3	2	7	5	2	1.5	36	24	20	21	127	98	
レインコート	1611	24	18	5	3	8	8.6	0	9666	10480	66	44	29	31	0	33	23	5	4	79	53	56	60	130	100	
セーター	6041	81	6143	28	52	56	0	7364	5138	73	49	29	31	2	1	12	8	1	0.8	34	24	12	13	128	99	
体操服	10069	125	9493	62	74	80	17	13	3826	8	6	38	25	12	13	5	4	7	5	0	19	13	7	7.5	108	83
帽子	5538	80	6037	25	27	29	2	1.3	4632	2620	45	30	38	41	0	23	16	9	7	46	31	28	30	128	99	
靴	4128	6	4.5	62	41	24	26	1	0.8	7652	10075	46	31	30	32	1	28	19	27	20	42	28	49	53	129	99
靴下	5941	35	26	33	22	37	40	1	0.8	6041	7355	56	24	26	0	26	18	25	19	61	41	32	35	130	100	
靴	615	15	15	42	28	44	42	0	5840	10278	40	27	18	19	0	33	23	16	12	68	45	31	33	130	100	
洋傘	114	33	0	0	6	6.5	0	4330	8564	30	37	82	34	0	94	15	15	11	120	80	55	59	130	100		

レイン・コートは三校が自由であることを望んでいる。(第15表・2)セーターは定められた方がよいという者の多い学校は冬の体操の時にセーターを着用するので、既に制定されたセーターを用いている。

体操服については制服のない学校を含む全部の学校が定められた方がよいことを望んでいる者が多い。(第15表・4)これは体育会等に集団美を必要とする場合の衣服の在り方として自然な要求であろう。如何に技は巧みであっても、各自がまちまちの衣服を身につけていたなら集団美は損なわれる。体操服に限らず団体生活にとつて集団美が大切な要素であることも忘れてはならない。

その他靴・靴下・靴・洋傘等大同少異はあるが、要は統制を乱さない自主性の下に乙女らしい流行を反映させて衣服心理の一面のはけ口とさせることも悪くないと考えられる。

その他の意見として

- a 思い切つた改良をすべきである。
- b 自主性を持つて衣服を選択するような指導することが教育だ。
- c 儀式用だけのユニフォームがあつてもよい。
- d 制服をだらしなく着ているのは見苦しい、制服の着こなし方を指導するべきだ。
- e 制服着用の期日を限定することは不合理である。

など積極的な意見があつたことはよろこばしい。

## 五、結 論

以上調査の結果を要約すると、女子高校生の制服の性格は従来のものから徐々に変わりつつあることが認められる。即ち、

(1) 制服は単なる通学服に過ぎない。

従来の制服は多目的に着用出来ることを魅力としていたが、衣生活が高度に発展して、目的にあつた機能的な服種が豊富に生産されるに至つたのでその必要がなくなつた。

(2) 制服の必要性については、制服を用いている学校では全体的に必要性を認めているが、制服を用いていない学校の生徒は必要性を認めていない。

必要性を認めた理由としては、学生意識を強めること、団体行動を統一する便利さ、経済的である点などであるが、制服の必要性を認めない生徒は、制服のあることの方が不経済だと反論している。この不経済という言葉の中には不便さという意味も含まれているように考えられるがこの点については具体的な調査を行っていないので、ここで結論は云えない。

(3) 制服についてその合理化を要望している者が多い。

制服の必要性は認めても、不合理な点についての改良を要望している。即ち夏暑すぎたり、手入が面倒な型や生地、或は着用期日の制限など従来の制服に関しての規則は少しも曲げずにそのままの姿で守つていこうとする関係者の態度に大いに反省するべきである。生徒は決して流行を追うようなことはなく、オーソドックスな学生らしい品位ある型や色調を望んでいる。この点関係者に適切な処置を望んでやまない。

(4) 制服にも審美性を持たせること。

従来の制服は実用性と象徴性に重点がおかれていたが、文化生活を営み、知性ある近代女性を育成するには美的訓

練が必要であり、その時代に適切な衣服として制服にも審美的要素を織り込まれることが要望されている。

以上制服の実態調査に基づく結論であるが筆者としても此の時代において、制服の不合理的な点は一日も早く改良し、合理性のある格調高い通学服が考慮されることを関係者各位に要望する次第である。

終りに此の調査に御協力頂いた関係学校の先生方、生徒諸氏に深く謝意を表します。

参考文献

- |                    |         |
|--------------------|---------|
| 1、被服科学 VOL.4. No.2 | 水梨サワ子   |
| 2、被服科学シリーズ No.7    | 祖父江 寛   |
| 3、被服科学シリーズ No.3    | 和田 憲夫   |
| 4、ドレス・デザイン         | 森岩 謙一   |
| 5、色彩と配色            | 佐藤 亘宏   |
| 6、衣生活 No.28        | 浦部 誠    |
| 7、衣生活 No.28        | 山形 恭子   |
| 8、被服大辞典            | 被服文化協会編 |
| 9、日本家庭大百科辞典        | 富山房     |